スイの魔法 4

ALPHA LIGHT

白神怜司
Shirakami Reiji

アルファライト文庫

Main Characters
主な登場人物
ノルーシャ
七人の魔女の一人、『螺旋の魔女』。〈幻惑の森〉に棲み、人との関わりを避けているが、実は面倒見がいい。
アンビー・ニュタル
七人の魔女の一人、『断崖の魔女』。いつも飄々としており、口癖は「〜ッス」。魔導兵器の生みの親。
ルスティア・フェズリー
ノルーシャの弟子その二。爽やかな美少年。いつも笑顔を浮かべている。
ネルティエ・グライエス
ノルーシャの弟子その一。スイを保護するために魔法学園に潜入していた。他人にも自分にも厳しいタイプ。
????
謎のツインテールの美少女。某国の指示により『宝玉』を狙っている。人間ではない。
スイ
主人公。銀髪蒼眼の孤児。十一歳。容姿・知性・魔力を備えた天才だが、超マイペース。
ファラ
伝説の金龍にして、スイの忠実な〈使い魔〉。魔法訓練の良き相手。
シャムシャオ
ノルーシャの従者である白猫が人化した姿。ファラとは付き合いが長い。

プロローグ

空に浮かぶ大陸。

強力な結界が張られ、地上からは決して見ることのできないその大地に、銀髪の女性と、幼い金髪の少女が立っていた。

「そろそろ来るわ」

銀髪の女性がそう言うと、不安気な面持ちで女性の服の裾をぎゅっと掴んでいた少女は、傍目にもわかるほど身体を強張らせた。

この浮遊大陸にたった二人で棲まうがために、少女は銀髪の女性以外の人間と話したことがない。彼女は、これから初めて迎えようという客人に、過剰なほど緊張していた。

しばらくして、二人の視線の先に見えていた何もない草原に光の線が浮かび上がる。そして、その光線によって描かれた魔法陣が煌々と光を放った。

眩い光の中、六人の女性が薄らと姿を現す。
きょろきょろと周囲を見回す者もいれば、怪訝な顔付きで二人を見つめる者もいる。六人は敵意こそないが警戒心を露わにしていた。
そうした来訪者の態度に、銀髪の女性の背中に隠れていた幼い少女は、獣のような唸り声を上げ、六人を威嚇して鋭い歯を見せる。
膨れ上がった少女の魔力を感じ取り、六人の女性たちが身構えた。
一瞬、張り詰めた空気が場を支配したが、銀髪の女性が少女の頭を撫でると、彼女の魔力は霧散していった。
しょぼくれて見上げる少女に銀髪の女性は微笑で応え、六人の来訪者の元へとゆっくり近づいていく。置いて行かれぬように引っついて離れない少女のあどけない様子を見て、六人もようやく警戒を解いた。
「ようこそ、我が家へ。地上に棲まう『魔女』の皆さん」
銀髪の女性は来訪者達を見つめ、柔らかな声で言った。

青の魔法を歌う『氷界の魔女』――レイリア。
赤の魔法とともに踊る『紅炎の魔女』――ヒノカ。

緑の魔法とともに駆ける『螺旋の魔女』――ノルーシャ。
黄の魔法を喚ぶ『断崖の魔女』――アンビー。
白の魔法で世界を照らす『光牙の魔女』――レシュール。
黒の魔法で誘う『深淵の魔女』――シア。

六人の魔女はそれぞれ一人で一国を落とせるほどの魔力を有する存在である。強大な力を持つ六人がこうして一堂に会するなどそうそうあることではない。
そのような存在でありながら、六人は今、緊張のあまり顔を強張らせていた。その表情から窺い知れるのは、目の前の存在に対する畏敬である。
――私達六人が束になってかかっても、アレには勝てないだろう。
――アレと私達とでは次元が違う。
六人はそれを感じ取っていた。
誰もがお伽話を通じて知らされた存在、『白銀の魔女』マリステイス。
彼女の圧倒的な力の前では、世界に名を馳せた『魔女』といえども言葉を失うほかない。
彼女の単なる気まぐれによって、自分達などいとも容易く消されてしまうだろう。さながら、圧倒的な「強者」を前にした、惨めな「弱者」――

地上では「強者」として振る舞っていた魔女達も、事ここに至っては「弱者」でしかなかった。

「――そう緊張することはないわ。私は別にアナタ達をどうこうしようなんて思っていないもの。そもそもここにアナタ達を招いたのは私なのよ。敵意がないことぐらい、わかっていると思ったけど？」

強者――マリステイスはあくまでも気負いなく語りかける。だが、六人は相変わらず気圧されたまま、どうすることもできなかった。

六人それぞれが『魔女』という称号――つまりは最強の称号を担ってはいるが、その自負と矜持をもってしても、マリステイスに見つめられると実感せざるをえないのだ。

自分達では彼女の足下にも及ばない、と。

いつまで経っても口さえ開くことができない六人に、マリステイスは呆れたように嘆息し、金髪の少女の頭を再び撫でる。

「この子はまだ生まれたばかりなの。ファラスティナ、お客様にご挨拶なさい」

「……こんにちは」

「ふふふっ。いい子ね、ファラスティナ。――それで。この子はちゃんと挨拶してくれたのに、せっかくお招きしたアナタ達は、私に挨拶してくれないのかしら？」

マリステイスが笑顔で促すと、ようやく六人の内の一人、最も年長の魔女が前へと出た。

「お招きくださり感謝する、私は『氷界の魔女』レイリア。そなたは『白銀の魔女』殿――で相違ないか？」

「ええ、そう呼ばれているみたいね。私の名前はマリステイス。この子はファラスティナよ。可愛いでしょう？」

「む……あぁ、うむ。ところでマリステイス殿――」

「――ごめんなさい。この数十年、人とは会っていなかったの。だから、もうちょっとぐらい砕けた喋り方でお願いできるかしら？　礼儀を持ち出されても困ってしまうわ」

悠然としたマリステイスの物言いに六人は困惑する。

何せ目の前にいる相手は、『白銀の魔女』なのだ。

お伽話の中では、不老不死とされ、地上に災厄が訪れた際に降臨すると言われた存在。

そして、天上人であり現人神とも信じられている、そんな崇高さの権化なのである。

それが、こうも緊張感に欠け、ごく普通に語るのを目の当たりにすれば、戸惑うのも無理はない。

先ほどとは別の魔女が、緊張した面持ちで前に出る。

「そう言ってくれるのならありがたい。私は――」

「――『光牙の魔女』レシュールさんね。もう名乗らなくて結構よ。アナタ達みんなを知っているもの」

マリステイスが、悪戯が成功したかのようにころころと笑う。

「アナタ達が下した決断も、私に接触しようとしている理由もわかっているわ。だからこそ、アナタ達をわざわざ召喚したのだから」

マリステイスの言う通り、六人はここへ喚び出されたのだ。

そもそも六人の魔女は『白銀の魔女』に接触しようとしていたが、その手段がなかなか見つからなかった。そんな折、何の前触れもなく目の前に転移魔法陣が現れ、この場所へと連れて来られたのである。

「見たこともない魔法陣だと思ったら、なるほど。さすがだね」

「ふふふ、世辞は結構よ。『断崖の魔女』にして『魔導兵器』の製作者、アンビーさん？　アナタもいろいろと面白い魔法を創ることには長けているようだし、ね？」

「……はあ。やれやれ、こちらの素性はすべてお見通しってわけだね。まったくもって秘密主義の私にはやりにくい相手だよ」

敢えて挑発するようにぞんざいな口調で告げたアンビーであったが、あっさりと自らの正体まで言い当てられて肩を竦めた。

「私はアナタ達に興味があったの。今まで見てきた歴代の『魔女』とはまったく違う選択肢をアナタ達は取ってみせた。その覚悟を私は歓迎する」

すべて知っているかのような口ぶりに『螺旋の魔女』ノルーシャが反応する。

「……ということは、私らを覗き見ていたってわけかい？　あまり褒められた趣味じゃないと思うけどねぇ、えぇ？」

「ふふふ、『螺旋の魔女』ノルーシャさん。そうやって私を挑発して本心を探ろうとするのは結構だけど、そんなに警戒しないで欲しいわね。私はアナタ達を騙すつもりはないわ」

あくまでも悠長な話しぶりに、ノルーシャが小さくかぶりを振る。

「ハッ、まったくもってからかい甲斐のない相手だよ。目くじらくらい立ててくれたほうが、まだ可愛げがあるってもんさ」

「あら、ごめんなさい。さっきも言ったけれど、人の前に姿を現すのは数十年……？　数百年ぶりだったかしら？　ファラスティナ、どっちだと思う？」

突然話しかけられ、少女は戸惑った表情でマリステイスを見上げる。

「えっ？　わたし、わからないよ……？　わたし、まだ四さいだよ？」

「凄いわね、ファラスティナ。ちゃんと年を数えてるなんて」

「っ⁉　マリー、おぼえてないの⁉」
「ええ、年齢なんて意味がないんだもの」
そんな二人の心温まるやり取りに、みるみる毒気を抜かれていく魔女達。
しかしこの場にあって、たった一人苛立ちを露わにしている者がいた。
白に近い金色の髪を伸ばした『光牙の魔女』レシュールである。
「マリステイス、私達には時間がないのだ。覗き見していたのなら知っているのであろう？　貴様に聞きたいのは、私達を蝕む〈呪い〉についてだ」
「レシュール。そんな言い方、良くない」
「シア！　そんなことを言っている場合ではないだろう！」
宥めようとする『深淵の魔女』シアに対し、レシュールは声を荒らげる。
しかし、シアは引こうとはせず、レシュールに双眸を向ける。
「ダメ。相手は『白銀の魔女』なのよ。私達は、彼女をなぞらえて『魔女』と呼ばれてるだけ。本物は向こう」
彼女のその言葉は、この場にいる魔女たちの心に、重みをもって突き刺さった。
六人は『魔女』といっても、所詮は『白銀の魔女』になぞらえて綽名されているに過ぎない。その事実を改めて思い出させたのだ。『白銀の魔女』は別格。彼女こそが『魔女』

の始まりの存在なのだ。それ故『白銀の魔女』は、『始祖の魔女』とも呼ばれていた。
「そんなことは気にしなくていいのよ、シア。私は自分がどう呼ばれているかなんて、気にしたことはないもの。それよりそろそろ本題に入りましょうか」
その言葉に、魔女達全員は固唾を呑んだ。
そうして、マリステイスは相変わらずのゆったりとした態度のまま話し始めた。
「アナタ達が言う〈呪い〉は必然の代償。強大な魔力の出し入れによって、身体という器が侵されてしまった病のようなもの。だから治療できるようなものではないの」
「そ、んな……」
あまりにあっけなく明かされた残酷な事実に、脱力したシアが小声で呟き、膝を折った。
彼女達は、『白銀の魔女』ならば降りかかる〈呪い〉を取り除くことができるのではないかという一縷の望みにすがってマリステイスを探し求め、そして、ようやく出会えたのだ。
それにもかかわらず、その希望は、こうもあっさりと打ち砕かれてしまった。
それまでと変わらず、悠然としたままのマリステイスが、落胆する魔女達を一瞥すると、さらに言葉を継いだ。
「――でも、どうしようもないわけじゃないわ」

「な、何か手立てがあるのですか⁉」

誰よりも早く食い付いたのは、『魔女』の中でも最も若く、少女とさえ言える魔女――『紅炎の魔女』ヒノカだった。

マリステイスは瞑目し、しばし思考を巡らせてから口を開く。

「……さっきも言ったと思うけれど、私はアナタ達の決断を歓迎する。確かに〈狂化〉という呪いは、魔女の暴走を抑えるという意味で安全な対策ではあったのよ。だから魔女達は、〈狂化〉から逃れるために、次の世代に力を受け渡してきた。でも、代を重ねる毎に、魔女の力は肥大し、後継の魔女達が耐え切れなくなりはじめているわ。次代に〈呪い〉を押し付けるのはもう限界にきているのかもしれない。それにね、今までのやり方は私も好きじゃないもの」

〈呪い〉を課された魔女達が皆一様に絶望に陥り、最後の望みをかけて自分を探していたことを、マリステイスは知っている。

――自分達が、『最後の魔女』となる。

それはつまり、彼女達が誰にも力を継承せずに〈呪い〉を受け入れるということ。

そして、負の連鎖を断ち切る存在となるということ。

次代に引き継がせて、自分だけが助かるという先人達のやり方をしないという決意の現れであった。

そうした彼女達の覚悟をマリステイスは理解し、だからこそ歓迎するのだ。

「ただ勘違いしないで欲しいの。私だってすぐにアナタ達を解放できるわけじゃないし、これから時間をかけて研究と調整を繰り返す必要がある。それに、恐らく――解放とは、アナタ達の死を意味することになるわ。それでもやると言うのなら、私は協力する」

命を捨てる覚悟はあるか。

そう問いかけるマリステイスの蒼い双眸からは、先ほどまでの柔和さは消えていた。

ノルーシャが口を開く。

「今更、自らの命一つで躊躇っていられるほど悠長なことを言っていられるような状況じゃないさ。〈狂化〉を誰にも背負わせずに終われるのなら、それに越したことはないね」

強い意志を見せつけられ、表情を緩ませたマリステイスは「なら、ついて来なさい」とだけ告げると、自らの家へと案内するように歩き出した。

それを追いかけるように、六人はゆっくりと付いて行った。

◆◇◆◇◆

――アルドヴァルド王国王都、アクアリル。

湖や川の数の多さから、『水の国』と呼ばれているアルドヴァルドの地は、またの名を『魔法王国』と言う。それは、現代の魔法に関する考察や研究を次々と打ち出したためであった。

さらに、新しい情報を付け加えるならば、ブレイニル帝国を中心とした世界の「敵国」という認識も強まりつつあると言えるだろう。

アルドヴァルドが、ヴェルディア王国王都ヴェルを襲撃した事件のことは、ブレイニル帝国を通じて周辺国へ伝えられていた。そのため、すでに周辺諸国はこの王国を徹底的に孤立させるべく動き始めていたのである。

――懐かしい夢を見たものだ。

女がゆっくりと目を開け、心の中で呟く。

窓のない部屋の中は、硬質で滑らかな素材によって覆われ、人の住むような雰囲気すら

感じられない。かつてスイが訪れた『放棄された島』や、『銀の人形』アーシャと出会った旧時代の『魔導研究所』と呼ばれた類の建物と同じような造りである。

部屋に灯りはないが、天蓋のついたベッドの下からは光がぼうっと浮かび上がっていた。

女は、ベッドの上でゆっくりと身体を起こすと、すぐ脇に置かれたテーブル上で魔導具が光を発していることに気付き、その光に手を翳す。

「――すぐに行く」

短く告げた女――レシュールは、ベッドから起き上がろうとした。

そこへ、タイミングを見計らったかのように乾いたノック音が四回。返事を待たずに入ってきた侍女が、深々と頭を下げた。

「おはようございます、陛下」

「あぁ、すぐに準備を。朝食はいらぬ」

「かしこまりました」

短い用件だけのやり取りを終え、レシュールはネグリジェを脱ぐ。

足下の魔法陣によって照らされた肢体は、腕から胸部、太ももにかけて、魔導言語の書かれた包帯が巻かれていた。そして、布の途切れた先からは、黒ずんだ肌が露出している。

「醜い姿だ。これが呪われた者の成れの果てよ」

「お戯れを。私にとってはもう見慣れたものでございます」
くっと自嘲するような笑みを噛み締めたレシュールに対し、侍女は表情一つ変えずにしれっと言い放ってドレスの準備を進めている。
レシュールは、そんな不敬な侍女の態度を受け入れていた。むしろ、他ならぬ主自身が過度に敬うような態度を取る必要などないと告げていたのだ。
やがて用意されたドレスを身に纏い、レシュールは侍女を連れて部屋を後にした。

アルドヴァルド王国の王城、玉座の間。
侍女が選んだ袖や裾の長い衣服によって、自らの肌を隠したレシュールは、大きな玉座に腰掛けて跪く男を見下ろしていた。
「ふむ、作戦は失敗。逃がしたか」
落胆の色が浮かんでいそうなものだが、レシュールの声色は淡々としたものであった。
失敗した作戦とは、ヴェルディア王国王都ヴェル襲撃事件のことである。
数名の部隊と、魔導人形と呼ばれる人型戦闘用魔導具を使った襲撃。彼らの狙いは『銀』の呼称で示されたスイとアーシャの二人の殺害であったが、作戦は失敗に終わり、報告した部下数名の命が失われていた。

それにもかかわらず、レシュールの態度は、どうでも良いと言わんばかりである。
男は一瞬ではあるものの眉をぴくりと動かした。
「陛下、追撃の命令を」
「構わん、捨て置け」
「は……？」
家臣としてはあまりにも不敬で情けない返答に、レシュールがくつくつと笑う。即座に謝罪を口にしようとした男の行動を制して手を上げ、言葉を続ける。
「作戦は確かに失敗したが、あの街に災厄を撒けたのであれば、『銀』が生きていようが大した問題はない。殺せぬのであればせいぜい利用してやれば良い。すでに『銀』はヴェルディア大陸を発ったのであろう？」
「はっ。現在も尾行を続けておりますゆえ、間違いございません」
「ならば尾行も打ち切れ。どうせ彼奴は『螺旋の魔女』に導かれ、ガルソに渡るつもりだ。尾行をつけたところで結果は変わらぬ。無為に犠牲を生むだけだ」
「……よろしいので？」
「すでに『銀』は『無』の魔法を多少なりとも扱えるのであろう。ヴェルの襲撃によって過敏になっている彼奴を無理に刺激すれば、被害が増える一方だ」

「しかし、『銀』はかの『銀の魔女』の系譜に連なる存在。ならば、我らの大願の邪魔になるかと……」

「くふふ、構わん。それより、『断崖の魔女』の足取りを追いつつ、予定通りあの計画を進めよ。『銀』に関しては先ほど言った通り、もはや捨て置いて構わぬ」

話は終わりだと言外に告げるが如く、レシュールが男から視線を外す。

すると、男はレシュールに今一度深く頭を下げ、身体を霧に包ませるかのようにその場から消え去った。

しばらくして玉座の間に誰もいなくなると、レシュールはゆっくりと立ち上がった。

そして部屋の隅へと歩いて行き、壁に手を当てると、黄色に輝く魔法陣が浮かび上がり、壁の向こう側へと続く通路が現れた。

レシュールは、その先へと足を踏み入れていく。

進みゆく先にあったのは、円形の広間であった。

魔法陣が輝く地面の上に、二つの球体が浮かんだまま、ゆらゆらと上下左右に動いて滞空している。

一つは眩いばかりに黄金色の光を放ち、もう一つは揺らめく黒い靄を漂わせていた。

マリステイスの造り出した、『闇の宝玉』と『光の宝玉』である。

光の帯に包まれて中空に浮かんだそれらは、確かに、ここに存在していた。

「すでに二つはこちらのもの。マリステイス、貴様の思い通りにはさせぬ」

目の前に浮かぶ二つの宝玉の向こう側にマリステイスの幻影を見出し、レシュールは睨みつけ続ける。

「私は、絶対に貴様を赦さない。貴様の目論見も、我々『魔女』を騙した罪も……ッ！」

◆◇◆◇◆

ヴェルディア王国王都ヴェル襲撃事件。

あれから数日の葛藤を経て、ヴェルディア大陸を後にしたスイは、一路『螺旋の魔女』が待つというガルソ島へと向かっていた。

同行したのは、『螺旋の魔女』ノルーシャの遣い、シャムシャオ。それまでエメラルドグリーンの瞳を携えた白猫の姿であったが、今は、切り揃えた白髪を揺らす人間の少女の姿をしている。

そして、ノルーシャの弟子である、癖のある長めの金髪と柔らかな微笑が印象的な少年ルスティア・フェズリー。さらに、『魔導言語』が刺繍された白いリボンで長く青い髪を

結わえた、少々冷たい印象を与える少女、ネルティエ・グライエス。
ヴェルディア大陸内で使っていた馬車は売り払い、船賃としたので、今は全員、その背中に簡素なバッグを背負い歩いている。
スイがノルーシャの元へと赴くことになった発端は、先の襲撃事件であったが、シャムシャオが道中で告げた話によると、そもそもノルーシャは、スイが成人――十五歳――となった暁には自分の元へと招く予定であったらしい。
それが早まって、今回、スイがノールシャに呼び出されたのは、襲撃事件の際に、スイが巨大な魔法を発動させてしまったからだという。

「主様、どうしたの？」
スイの近くを歩いていた〈使い魔〉金龍のファラがスイに声をかけた。今、彼女は人の姿を取っており、いつも通りの白いワンピースに身を包んでいる。
「うん、ちょっと考えてたんだ」
「……もしかして、チェミのこと？」
チェミとは、スイと同じ教会に住んでいた天真爛漫な少女のことである。彼女はアルドヴァルド王国の襲撃事件によって命を落としたのだ。

チェミの名前を聞いて、スイは一瞬ドキッとしたが、「そうじゃないよ」と告げて、かぶりを振った。
すでにヴェルを離れておよそ二十日が経つが、今でも、チェミを助けられなかった瞬間を夢に見てうなされることはある。しかしスイは、義弟のクリスと約束したのだ。お互い強くなろうと。だから、うじうじと悔やむようなことはしないようにしていた。
スイが歩きながら考え込んでいたのは、ノルーシャの予定を早めることになったという巨大な魔法についてであった。
それは、スイが敵視した者達を消失させる広範囲に及ぶ魔法。
その威力たるや、ただ破壊するだけの魔法とは比べ物にもならないほど圧倒的だった。
それに、ひとつ気になっていたことがある――
スイは自分の手を見つめた。
「……ファラ。あのとき、僕の手に現れた本は一体何だったんだろう？」
首を傾げて黙ったままのファラ。
彼女に代わって、シャムシャオが尋ね返す。
「本、ですか？」
シャムシャオは僅かに逡巡する素振りを見せ、「詳しくは私もわかりませんが」と前置

きして説明をはじめた。

「旧時代、それこそノルーシャ様ら『魔女』が活躍していた時代には、『魔導書』と呼ばれる不思議な本が存在していたそうです。巨大な魔法を使用する際に出現したという特徴から見ても、それなのではないでしょうか。どういった原理なのか私もわかりませんが、それがスイの中で構築され、具現化したのかもしれません」

「僕の中で構築された？」

「私もノルーシャ様が使っている姿を見たことがある程度ですので、詳しくはノルーシャ様本人に尋ねるべきでしょう。どちらにせよ、そこの駄蛇に尋ねてもわかるはずはないと思いますよ」

シャムシャオに揶揄され、ファラが怒りを露わにする。

「……駄蛇だと？　言ってくれるな、白猫風情が！」

険悪な雰囲気を感じ取ったルスティアとネルティエが、前を歩くシャムシャオとファラの二人から距離を取る。ネルティエが、うんざりといった様子でスイへと振り返った。

「ねぇ、ちょっと」

「ん、どうしたんですか？」

「また始まったみたいよ」

「あー……放っておきましょう」
スイはあっけらかんとした調子で、あまり気にしていないようだ。
そうこうしている間に、二人の争いはさらにヒートアップしていく。
「――だから言っているのです。アナタは昔から成長していないと。大人の人間の姿を取っているのに、スイには甘えてばかり。アナタは当時のままの幼い姿のほうが分相応というものですよ」
「言いたい放題言ってくれるな、シャオ……！」
「まぁ、スイの保護者の役割を果たすためには、大人の姿を取るのも悪くない選択ですが……、はっきり言って似合いません」
「あーーーっ！　似合わないって言ったー！」
「そういう子供じみた反応をするから、似合わないと言っているのです」
船に乗り込んだあたりから、二人はずっとこの調子である。
「と、止めなくていいのかな……」
ルスティアが一応心配するような素振りを見せるが、スイは終始、笑顔のままである。
「あはは、二人はずっと昔から知り合いだったみたいですし、それに、ファラはからかわれてはいるものの、どことなく楽しそうですよ。ほら、嬉しそうに顔を赤くしてますしね」

スイの的外れな発言に、ルスティアがツッコミを入れる。
「怒ってるから顔が赤いんだよ、スイ君！」
小首を傾げるスイに、ルスティアとネルティエが嘆息して目を合わせた。
「ルティ、この子って天然なのかしら……」
「ひ、否定はできないかもしれないね」
彼らは、スイが人のことをあまり見ておらず、他人の感情の機微に尋常ならざる暗愚ぶりを発揮するという事実を未だに理解していなかった。
二人の喧嘩を笑って見ているスイはともかく、しっかり者のネルティエさえ止めようとしないのには理由があった。ネルティエが、ルスティアに向かって告げる。
「シャオの毒舌は、無意味に人の感情を逆撫でたり傷つけたりするものではないわ。ある意味、親愛の証なのよね」
ネルティエはこれまで何度も、シャムシャオの毒舌に心を折られ、砕かれ、磨り潰されてきたが、それでも、彼女のそれは愛情表現のひとつだと捉えていたのだ。
それに、確かにスイの言う通り、言い合うシャムシャオとファラは楽しそうにも見えなくはない。

とはいえ、シャムシャオの口撃は、強烈に続いていた。
「いいでしょう、ファラスティナ。ノルーシャ様にその姿を見せて、どういう反応が返ってくるか賭けてみましょう」
「ノルーシャに？　大人になったって喜んでくれるもん！」
「フッ」
「鼻で笑うな！　ムカつく！」
どうやら悪意全開のシャムシャオの口撃がファラの心にクリーンヒットするという場面が展開されているようである。
どう贔屓目に見ても、二人の関係は、スイが言うような楽しそうな間柄でも、ネルティエが考えるような親愛の証でもなく、最悪の相性であると言ったほうが適切だった。
スイが口喧嘩を続ける二人を見てから、ネルティエへと視線を向けた。
「……ほんとにこれが親愛の証？」
「う、うるさいわね！　アンタだって似たようなこと言ってたじゃない！」
スイの言葉に続きルスティアからも疑念の目を向けられ、そっぽを向くネルティエ。
もちろん、シャムシャオも本気でファラを馬鹿にしているわけではない。昔から知っているからこそ、からかっているだけ――のはずであるが。

「ほらほら、大人の姿でそれでは思いやられますね。これでは勝って当然。賭けとして成立しません。残念でしたね、ファラスティナ」
「バ、バカにするなぁ！」
「バカにしてませんよ。ただバカを見ているだけです」
ファラは、「ぐぬぬ」と悔しそうにシャムシャオを睨みつけると、スイに駆け寄った。
「主様！　アイツ殺す！」
「うん。そろそろ休憩しようか、ファラ」
「流されたっ⁉」
ファラとシャムシャオの仲が良いんだか悪いんだかわからないやりとりを通して、親愛とは何ぞや、という哲学めいた問いに頭を悩ますスイ達であった。
ともあれ、一行はすでにガルソ王国内に足を踏み入れていた。

１『幻惑の森』

ガルソ王国に入ったスイ一行は、島の中央北側に広がる森に向かって歩いていた。

その森に棲んでいるのが、『螺旋の魔女』ノルーシャである。
しばらく歩いて日も傾き始めた頃、もうすぐ森が見えるという辺りまで辿り着く。
ここでスイ達は、野営の準備に取り掛かることにした。
森の中に入れば、三時間もあればノルーシャの家に着くだろうが、日の暮れた今、急いでも到着は真夜中になってしまうと考えたのだ。
明朝ここを出て昼過ぎには到着する手筈で、準備に取りかかる。
シャムシャオとファラは、相変わらず例のやり取りを続けていた。
それを見たスイが明後日方向の解釈を広げ、ルスティアは苦笑し、ネルティエは煩わしそうな表情を浮かべている。
最近ではそんなやり取りも、この長い旅路での良い息抜きになっていた。
食事を終え、それぞれの手元にカップに注がれた温かい飲み物が行き渡ると、シャムシャオは焚き火を囲む全員を見回し、一つ咳払いをして話し始めた。
「明日はいよいよ、ノルーシャ様の元へ到着できるでしょう。その前に、私が知っている情報を伝えておきます。ノルーシャ様から、そうするようにと命じられておりますので」
それまでの和やかな空気が一変し、水を打ったような静けさに包まれる。
「まずは『魔女』という存在がどういうものか、それを説明させていただきます。そして、

その存在が背負わされた――〈呪い〉について」
シャムシャオはそう言って、まず『魔女』の称号について次のように説明をした。
『魔女』とは、旧時代ヘリンよりもさらに前の時代――エイネスに姿を現した六人の圧倒的実力を誇る魔法使いを指した称号であり、お伽話の『白銀の魔女』になぞらえてつけられたということ。
また、誰もが憧れ、尊敬し、目指す山の頂にいる存在であり、最初は民衆や国民から呼ばれるようになった渾名が発端ということ。
こうして『魔女』の基礎的な知識を踏まえたうえで、いよいよ話の核心である〈呪い〉について語り出した。
「――当時より『魔女』は素養のある者を弟子として育て、一子相伝の名の下に技術を受け継いでいく、というものが表向きに広がった認識でしたが、その理由は他にあったのです」
「他の理由？」
「ええ。それが〈呪い〉です。『魔女』の心を壊し、暴虐の限りを尽くす悪の化身となる〈呪い〉。それは何をもってしても防ぎようのない悪夢のような現象――〈狂化〉と呼ばれています」

スイの問いかけに返ってきた言葉は、残酷な現実。
しんと静まり返るなか、パチパチと薪が爆ぜる音だけが響いている。
さながら、時が止まっているかのようであった。
一拍置いて、シャムシャオは静かに続ける。
「マリステイス様が仰るには、それは、膨大な魔力に耐えられなくなってしまった際に起こる器の崩壊。そして、それに付随する魔力の暴走、だと考えられる現象だそうです。つまりこの現象は『魔女』と呼ばれるほどの実力を持った者だからこそ起きてしまうのです」
「……な、何よ、それ……。そんな話、お師匠様は一言だって……！」
「言えるとお思いですか、ネル。自らを親のように慕うアナタに、自分はいずれ化け物となってしまうかもしれないなどと。余計な心配をかけまいと考えたあの方の意思を、少しは考えなさい」
「それでも……！　言ってくれたって良かったのに……ッ」
ネルティエが歯噛みしつつ呟いた。
孤児として拾った自分に対しても、実の親子のように接してくれた師でもあり親でもある存在。そんなノルーシャが秘密を打ち明けてくれなかった。その事実に、彼女は信用さ

れていなかったと感じていた。
「いずれあの方も伝えるつもりだったのでしょう。〈狂化〉は『魔女』を受け継いだ者達だけが知り、隠してきた真実。一般的な文献に載るようなものでもありません。だからこそ、代々の『魔女』は〈狂化〉を恐れ、弟子を育てて自分の力を受け渡してきました」
「ちょっと待ってくれないか、シャオ。その〈狂化〉とやらが知られているということは、〈狂化〉によって壊れてしまった『魔女』の前例があるってことなのかい？」
「……ルティの言う通りです。遥か南西にある『死の大陸』は知っているでしょう。あそこには、今もなお生き続ける『〈狂化〉した魔女』が封じられているために、魔素が発生せず、ありとあらゆる生き物が存在することすら許されない不毛の地と化しているのですよ」
「じゃあ、旧時代ヘリンの終焉に魔導戦争で死滅したと言われている『死の大陸』は、その前から……？」
「その通りです。あの大陸は『〈狂化〉した魔女』によって死に絶えたのです。このままではノルーシャ様ら魔女は、そんな化け物になってしまうのです」
いっそ冗談だと言ってくれさえすればどれだけ気が楽だろうか。そう思い、ネルティエは目の前が真っ暗になってしまったかのような錯覚に陥っていた。

スイもまた、歴史が改竄されたという事実を知って、愕然としていた。
そもそも『死の大陸』は、『魔導戦争』によって死滅した大地であると歴史書に記されている。その事実が間違ったものであるならば、一体何故――誰が何のためにそんな真似をしたのか……
――様々な研究を発表しているアルドヴァルド。
ヴェルの王立図書館の蔵書をすべて網羅したスイは、それらの情報が彼の国から発表された文献に記されていたことを知っている。
あの国が意図的に捻じ曲げたのか、それともアルドヴァルドは真実を知らないのか。
そうした疑問を抱くスイの横で、シャムシャオはとたんに暗くなったネルティエの様子に気付き、口を開いた。
「ノルーシャ様はもちろん、他の魔女も、誰かに次代を担って欲しいなどとは思っていません」
「……じゃ、じゃあ、スイを監視して連れて来いって言ったのは……」
「ん？　やはり勘違いしていましたか……」
「え……？」
ネルティエの言葉にシャムシャオが嘆息して告げた。

「スイをあの方の後継者にするためではありませんよ。あの方は自分達が『最後の魔女』であろうと心に決めています」
「最後の、魔女……？」
「その通りです。その願いを叶えるために、彼の力がどうしても必要なのです」
そこまで言って、シャムシャオが視線を向けると、スイは小首を傾げた。
「僕が？　何をすればいいんですか？」
「それはノルーシャ様から教えられることになるでしょう。今はただ、『魔女』が置かれている状況と、〈狂化〉という現象について知っていれば問題はありません。ネル、ルティ。アナタ達も、ノルーシャ様が抱えている問題について理解していれば結構です。それ以上に何かをしろとは言いません」
「そんな――！」
「――わかったよ、シャオ」
「なッ、ルティ⁉　アンタ、お師匠様が苦しんでいるのに見過ごすって言うの⁉」
ネルティエが隣に座っていたルスティアへと詰め寄るが、彼はいつもの柔和な笑みを消してネルティエを真っ直ぐ見つめ、頷いた。
「僕らに何かができるなら、そうするさ。でもシャオがああ言ったってことは、僕らには

どうすることもできないんだと思うよ。僕ら以上のことをできるシャオがそう言うんだから、それは間違いない」
「でも、でも……ッ！」
「ネル、間違えちゃいけない。僕らは僕らでやるべきことをして、少しでもお師匠様の気苦労を減らすべきだ。もしも何もできないと言うなら、せめて余計な些事に巻き込まないように気をつけるしかないよ」
ルスティアの言い分はもっともだ。そうネルティエも理解していたが、理解できても納得できるかと言われれば、答えは否だった。俯いて唇を噛んでいたネルティエが立ち上がる。
「……ちょっと外すわね」
一言だけ告げて、ネルティエはその場から駆け出していった。一行の間に重苦しい空気が流れ、スイが追いかけようとしたところ、ルスティアがそれを制して立ち上がる。
「僕が行くよ、スイはここでもう少し話を聞いておくといい。そっとしておいてやってくれ。今のネルはたぶん、頭の中がこんがらがっているだろうからね」
苦笑を顔に貼り付けてルスティアは頬を掻きながら、ネルティエの後を追って歩いていった。

そんなやり取りを見ていたシャムシャオが、一つため息を吐いてスイを見つめる。
「ネルにとって、ノルーシャ様は母親のような存在なのです。ここはルティに任せるのがいいでしょう。あぁ、でも、もしスイに被虐嗜好があるのでしたら、今から行けばもれなく彼女の八つ当たりを受けることができますが……」
「えっ、自分から痛い思いしに行くのを好む人がいるんですか？」
「……いえ、なんでもありません。アナタはまだまだ子供でしたね」
そこへ、ファラが口を挟む。
「主様、ひぎゃくひこうって？」
「痛くされるのが好きな人のことかな？　被虐嗜好？」
「ふーん、そんなの嫌に決まってるのにねー」
笑い合う二人を見ながら、シャムシャオが表情を歪ませた。
「……ぐっ、なんだか私だけがひどく穢れてしまっているような感覚が……」
シャムシャオは気を取り直すように一つ咳払いをして、いつも通りの人形然とした表情へと戻ると、今度はファラへと顔を向けた。
「ファラスティナ。アナタは〈狂化〉という現象についてマリステイスから何かを聞かされてはいませんか？」

「……私は、何も聞かせてもらえなかったよ」
「そうでしょうね。あの頃のアナタはまだ生まれて間もなかったんですから」
「むっ」
「いえ、しょうがないでしょう。アナタはあのマリステイスと共に生き、そして彼女の願いを聞いて長い眠りに就いたのです。その願いを覚えていますか？」
「『自分の代わりにあまりにも重く苦しい運命に晒されてしまう彼を、守って欲しい』。そう言われた」
それは、スイがマリステイスと初めて出会ったときに、伝えられた言葉でもあった。
ブレイニル帝国での『銀の人形』――アーシャとの邂逅、そして対立。ファラとすれ違い孤立したスイは、夢のような場所でマリステイスと出会ったのだ。
ファラもまた思い出す。魔法がもっと一般的で、強力だった時代――エイネスのことを。
当時は、様々な力を持った獣がいて、自然も多く、未開の地が広がっていた。また、天空に浮かんだ大陸や海底に沈んだ都市など、数多くの神秘が広がっていた。
生まれたばかりの金龍、ファラは、偶然にもマリステイスによって拾われたのだ。そして、彼女は大切に守られて育ち、様々な世界を見せてもらった。そんな日々がずっと続くと思っていた。

しかし、世界に名を馳せる『魔女』が大挙してマリステイスの元を訪れたことで、そうした平穏な日々は終わりを告げたのだった。
「マリーが言っていた重く苦しい運命って、もしかして〈狂化〉が関係しているの？」
「私もマリステイス様が何故そう仰ったのか、真意はわかりませんが、恐らくはそうでしょう。アンビー様は詳しくご存知のようですが、私には……」
シャムシャオとて、そのすべてを『螺旋の魔女』から聞かされているわけではなかった。
教えてもらっているのは、『魔女』が〈狂化〉という現象に苛まれていること。そして、そうならないためにスイが必要だということだけだ。
ふと思い出したように、スイがシャムシャオに尋ねる。
「そういえば、アンビーさんはアーシャとミルテアさんを連れて動いてるはずですけど、あの人もさっき言っていた〈狂化〉に苛まれているんじゃないんですか？」
「あの方は〈狂化〉を抑えるため、魔法を扱う際は魔導具を使っているはずです。魔力を使うのは控えるべきなのは確かなのですが……いざとなれば使うつもりでしょう。幸いあの方は〈狂化〉の進行も遅いようですし、それにどうやら自分の子供を放ってはおけないのだそうです」
「え、アンビーさんって子供いるんですか？」

「いえ、そういう意味ではありません。彼女は、自分がこの世界に生み出してしまった『魔導兵器』を破壊して回るつもりのようです」

「『魔導兵器』を生み出した……？　『魔導兵器』の研究に携わっていたとは聞いていましたが……」

再び唖然とするスイ。こうして驚くのは、今日だけで何度目かわからない。

相変わらず、シャムシャオは淡々と続ける。

「驚くのも無理はないですが、彼女は『魔導兵器』の生みの親であり、現在の魔導具の礎を築いた第一人者でもあります。数多くの魔法を系統化し、魔法陣を解読した上で、それを誰でも扱える一般的な道具へと転用する技術を生み出したのです。その始まりが『魔導兵器』。つまり彼女がいなければ魔導具という概念すら生まれていなかったことでしょう」

さらに、シャムシャオは説明を続ける。

「今世間で【大魔法】と呼ばれている魔法陣を使った魔法は、あの時代に造られたもので、現代とは違って当たり前に使われていたものでした。現在一般に知れ渡っている魔法は、当時でいえば【簡略魔法】の類でしかありません。イメージを魔力によって発現させるのは本来、使い慣れた弱い魔法でしか使わない技術でしたし、当時は誰も使おうとはしませんでした。この辺りの知識と現代の齟齬についても、ノルーシャ様に学ぶべきでしょう」

立ち読みサンプル
はここまで

「……そう、ですか。それはそうと、どうしてアンビーさんが『魔導兵器』なんて危険な代物を造ったりしたんでしょうね……」

アンビーの性格を思い出してスイが呟く。大量殺戮兵器ともなりうる危険な代物を、あの昼行灯さながらの飄々とした雰囲気のアンビーが造ったと言われても結びつかない。

『魔導兵器』が眠っているとされる場所とその地図は、ブレイニル帝国の地下で見たことがあるが、スイにとって『魔導兵器』そのものは依然として未知なる謎の物体なのだ。

「アンビー様が『魔導兵器』を造り出したのは、〈狂化〉という現象に対する彼女なりの備えの一環だったのです。ノルーシャ様や他の魔女は、つい十五年ほど前まで、封印という形を通して深い眠りに就いていました。その間にもしも誰かが〈狂化〉してしまったら……。そう考え、暴虐の化身となった自分達と戦えるだけの戦力を用意しておいたのでしょう」

シャムシャオの説明に、スイの疑問が氷解していく。

大魔導時代――魔法だけがすべてとも言える時代に生き、『魔女』にまで上り詰めた実力者でありながら、魔法を上手く扱えない者達にも戦う力を与えてきたアンビー。彼女は、そうすることで、もしも自分達『魔女』が〈狂化〉に陥ったとしても戦える力を、残った者達に授けた。